

## 7 章 共有される道 The shared street

／公と私のはざままで

- 7-1 尾道坂の町の形成
- 7-2 立ち止まる、とどまる、集う
- 7-3 <尾道的パティオ>
- 7-4 坂の町細街路の Node 結節点



庇を借りる

緑道や公園などの都市空間が市民に親しめるように整備される—これが今日一般的に望まれ実行される街づくりのケースであるが、それとは逆に、私的な空間が連なって街が形成されるケースも存在する。例えばアルジェリアのカスバのように、中世に起源を持つ街々の多くは、外敵の侵入を迷路に似た細街路（路地イコール主要道路なので細街路と呼ぶ）で防ぐ城塞都市であった。近代化の時流に取り残され、スラム化するばかりに見えた細街路の街は、序文で述べたように、都市計画の画一性を指摘する新世代の都市計画家によって再評価され（今日の外敵はクルマである）、世界遺産に登録され、観光客でにぎわうなどして、名誉回復を果たした。

新世代都市計画家の名は、ケビン・リンチ、ドナルド・アップルヤード、ジェーン・ジェイコブス、そしてC. アレクザンダー等々である。彼、彼女らのキーワードは＜共有される道 The shared street＞であった。道は空間的社会的に、居住環境の一部であるべきである。しかし、アメリカの郊外からは、それらはすでに消え去ってしまった。ヨーロッパ、中東、日本の伝統社会ではなお残る＜共有される道＞に注目し、学ばなければならない—とするのが彼、彼女らの主張であった。

都市のインテリアとは、＜共有される道＞で実践されるべき計画学である。しかしそれはどこにあるのか。移築保存された民家村で、見学できるだけなのか。都市のインテリアが、テーマというより漠然とした期待に過ぎなかった折、2008年12月に中四国支部行事として実施した尾道散策会（空き家再生プロジェクトの視察見学会）でそれを見つけた。アルジェに行かなくとも、＜共有される道＞は地元にもあった。

## 7-1 尾道坂の町の形成

### 坂の町小史（後掲地図参照）

郷土誌の知見を借りると、尾道史には三つのエポックがあったという。まず中世期、県北の高野山荘園から米穀を積み出す倉敷地として尾道は歴史に登場し、今も市街地の景観軸を形成する真言宗浄土寺、同西国寺、同千光寺の三山を残した。続いて近世期、天然の良港（尾道水道）を有する海運商都として発展し、山陽道に沿って市街地が形成された。今日の商店街は、後に沖出しされたものである。千光寺山斜面には名家豪商の寄進による寺社が競って建設され、今も寺社町特有の情緒を醸している。ともかくこの時、斜面は一部選ばれた者のみに利用が許された聖地（墓地の数と広さには驚かされる）であった。

今日注目が集まる坂の町は、明治期近代に至って、鉄道と国道の建設に伴う立ち退き

代替地として千光寺山斜面が当てられた事跡に由来する。山の手のハイカラ住宅、茶園（さえん）と呼ばれる和風別荘が、当時の盛況を忍ばせている。

桜の名所で知られる千光寺公園と参道の石段は、観光寺路線に目覚めた千光寺の主導によって建設されたとの故事は面白い。日清日露戦争、第一次大戦後（当時の呼称は欧州戦争）の日本経済の活況は歴史が示すとおりであり、県下第一の港湾都市であった尾道の商業発展は特に目覚ましく、後にレトロモダンとの評判をとる近代建築の名品を数多く残した。

さて、以上は誇り高き尾道の面目を護るための前置き、ここで注目する〈細街路の街づくり〉は、戦後、対岸向島町の造船ブームを下支えした結果、超過密住宅街となった坂の町の残照である。後年、小津安二郎監督が「東京物語」を尾道で撮り、近年は当地出身の映画作家大林宜彦氏が数々の話題作のロケ地に使ったことによって、尾道坂の町は再発見された。「転校生」の階段落ちが特に有名である。家賃の安いアトリエを求めて集ったアーティストのインスピレーションと労働力を得て（パイオニアはく鼻の館〉次図 No. 50）、坂の町は往年のそれとは別種の活気を取り戻しつつある。

#### 宅地と細街路の生成メカニズム（次ページ地図参照）

国土地理院の地図には、2 mおきに等高線が記入されている。等高線は斜面勾配を表す架空の線であるが、千光寺山の斜面に描きこまれた等高線は実にリアルである。というのは、元々斜面は果樹や菜園の段畑のかたちで保全されていたので、等高線はそのまま段畑の形状を表しているからである。段畑には等高線に沿ってスピーディーに移動する農道（以下、山ノ手道）と、高低差を凌いで移動する急こう配の坂道、階段道が設けられていた。法面保護の定石として、これらには排水側溝（写真）が設けられていたはずである。段畑は今日のような都市計画法によるチェックを経ることなく（当時は都市計画区域ではなかった）、わずか石垣補強のみで宅地化されたと思われる。



市史郷土史を参照すると、三か所において計画的な開発行為が行われた事跡がある。ひとつ目は大正末期の郊外住宅地開発ブームに呼応した、山ノ手道北側（正確には北西側）のディベロッパーによる宅地開発である。等高線をよく見ると、山ノ手道のところから斜面勾配がきつくなっており、山ノ手道の北側はほぼ山林であったと推察される。眺望絶佳として知られた高台住宅地の顧客は富裕層であり、当時流行の和洋折衷住宅が、競って建設されたものと推察される（写真は図中番号 36 西洋館）。

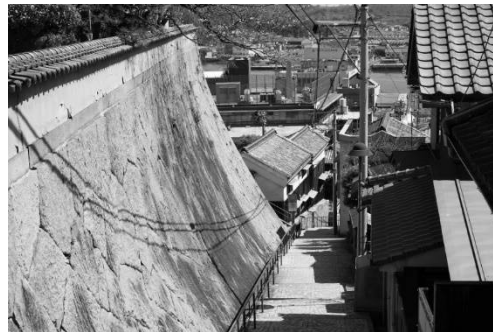


二つ目は千光寺参道の整備である。郷土史によると、千光寺は元々長江街道を挟む向かい側の山系に位置する浄土宗西国寺（次ページ地図）の末寺であったという。道路不備のせいで参拝者が少なく、廃寺もやむなしと思われた明治の中期、檀家の集會に同



席した全国の事情に明るい藍商人の三木半左エ門が、瀬戸内の眺望を活かして観光寺として再生したらどうか（モデルは香川県の金毘羅さんであった）と提案した。計画の骨子は、山頂境内の桜の名所化と参道の整備であった。市制を敷いたばかりの尾道市もこの計画に乗り、尾道は指折りの桜名所として全国に知られるようになった。だから参道は、門前町の形成を意図した都市計画道路なのである。山頂境内も計画通り、市の公園へと移管された。三木は市の財政を救った恩人として、名誉市民に遇されている。

三つ目は新参道である。中腹に「天春の石垣」(No. 49) と呼称される名刹仕立ての石垣に護られた地元企業の別邸がある。大正初期に天野春吉という地元商家が、別邸（茶園）を建てるために広大な敷地を造成し（等高線が大きく張り出している）、工事に使用した山道を美しい石段に整備して、市に寄付したものだという。混み合う千光寺参道のバイパスとして、先を急ぐ人に利用されている。



以上の理由から坂の町の道は、メインストリートの山ノ手道でさえ自転車バイクも通れない＜細街路＞のままに置かれたが、何ヶ所か登り口があって（主たる箇所は土堂小学校 No. 37 である）、部分的ながら自転車バイクが往来している。このように道であれだけの家屋をどうやって建てたのか。空き家再生に取り組む方の言では人力とのこと、だからこそ解体古材が重用され、景観的雰囲気を持続するわけである。散策中に一度だけ、坂の町で工事する＜トラック＞を目撃した。



さて、絶えず屈曲し、アップダウンを繰り返す細街路で、何が＜共有＞されているのか。小津映画、大林映画の影響と細街路アーティスト、空き家再生グループの頑張り、レトロというよりはただ古びた住宅街に、本格カメラを首にさげた観光客が押し寄せるようになっている。千年の古都の風格に支えられて観光ブームとはいえ、類型化された観光とは異なる＜新しい価値観＞が、ネット社会の情報網を駆使する新規の観光層によって発見されているに違いない。メンバーの一人が尾道坂の町で試みたデザインサーベイ\*<sup>1</sup>に基づいて、共有物の考察を進めてみたいと思う。

- \* 1. 「尾道の斜面地における細街路の空間構成要素が人間に及ぼす影響について」  
－「立ち止まる」「とどまる」「集う」の3つの行動パターンを用いて－  
日本インテリア学会論文報告集 25 (2015.3)

## 7-2 立ち止まる、とどまる、集う

もくもくと坂の町を歩いている人は、対比されるクルマがないので＜歩行者＞とは言えない。では何か。千光寺の顔を立てれば参拝者、坂の町を徘徊する人は散策者か探索者、地元の人はもちろん生活者である。ともかく観光にせよ探索にせよ、行動に主体性がなくては、この町からは得るところは少ない。観光情報誌の星評価など無視できる人にも、坂の町は自分の隠れた資質が発見できる＜都市のインテリア＞になる。

前掲「尾道の斜面地における－」では、散策者が示す①何かを見つけて＜立ち止まる＞、②関心が持続して＜とどまる＞、③同心の人が＜集う＞という3つの行動パターンの観察を通して、細街路を＜意味する場所＞にする空間構成要素の拾い出しを試みている。散策者は20人のゼミ学生である。坂の町の所定ルートを歩き、気がついたものをノートし写真を撮るために数秒＜立ち止まり＞、もっとよく見るために数分＜とどまり＞、さらによく観察してみようととどまり続けている内に、心を同じくするものが＜集う＞という、散策行動の再現実験を行った。

記録された細街路の空間構成要素を要約すると、次ページの通りである。同表は坂の町の備忘録である。記録された要素に沿って、細街路の景観を再現してみよう。

### ＜立ち止まる＞

瀬戸内の眺望が坂の町の空間資産であるとはいえ、坂の町は実はきわめて見通しの悪い町なのである。例えば東西に横断する山ノ手道は、高台に位置するので眺望絶佳の

\* 2. 空間構成要素一覧

			立ち止まる	とどまる	集う
		風景	○	○	
	外部空間	景色	景色	○	○
			海	○	
			山	○	
			住宅	○	○
	建物	住宅	住宅	○	
			廃屋	○	○
			門扉	○	
			塀	○	
			渡り廊下	○	
			二階廊下	○	
			門	○	
			白壁	○	
		土壁	○		
気になったもの		寺院	寺院	○	○
		店舗	店舗	○	○
		道	通り道	○	
			トンネル	○	
			細街路	○	
		工作物	分岐	○	
			電柱	○	
			ランプ	○	
			灯籠	○	○
			提灯	○	○
	井戸	二階井戸	○		
		井戸	○	○	
	置物	石像	○	○	
		置物	○	○	
	のぼり	のぼり	○		
		鯉のぼり	○	○	
	椅子	椅子	○	○	
	オブジェクト	構造物	フェンス	○	
			手すり	○	○
			階段	○	○
		石	石畳	○	○
		石垣	○	○	
	移動手段	バイク	○		
		自転車	○		
	宗教	お地蔵さん	○	○	
		ほこら	○	○	
		墓	○	○	
		鐘	○	○	
	自然	植栽	植栽	○	○
			花	○	
			果実	○	
	動物	休憩	猫	○	○
			日陰	○	
	状況	伝達機能	掲示板	○	
			看板	○	○
			ポスター	○	○
	その他	その他	線路	○	
			陸橋	○	
			鳥居	○	○
			壁画	○	○
			消防器具	○	

道と思えるが、実情は北側宅地の石垣と南側坂下住宅の土塀板塀等（目的は目隠しである）によって視界が閉ざされた隘（あい）路なのである。



左端写真の風雅な杉板塀の元の主は、格式と信用を訴える業界会員証を掲げた料亭旅館である。二階に玄関が設けられていたものと思われる。



山ノ手道路の南側坂下に建った建物の多くは撤去され、老朽化した塀のみ放置された光景は一見剣呑に感じるが、これらが坂の町の景観を護っているとも言えなくもないので、一概に撤去すべきとは言えない。一ヶ所、No. 48 帆雨邸の板塀が、カフェとして再生された機会に更新されているので、工法が検分できる。裏側から見ると、瀟洒に見える板塀も意外な大工事によって支えられていることが分かる。





以上のように山ノ手道路には眺望が欠けているが、西端と東端の二ヶ所に、急峻斜面のせいで住宅が建てられないまま、眺望が開けた場所がある。



さて、見通しが悪くてなぜ散策か。実はこの見通しの悪さこそが、散策者が度々立ち止まる>要因になっているのである。地元住民はともかく、外来者は角を曲がるごとに、道が分かれるごとに、自分用の目印(サイン)を記憶に焼き付け、地図に印して坂の町の土地鑑を身に着けなくてはならない。これが表中に記載された空間構成要素なのである。これらは偶然の事物である場合が多いが、住民アーティストによる意図的なメッセージも数多く含まれる。次ページにこれら空間構成要素の映像を掲げる。

一段目左端、道の上に家が建っている、坂の町を象徴するシーン、公私共同の極みである。元は寺社の所有地だったからこそ(あるいは今も)、起こり得る現象である。続く2枚は仏教施設のランドマーク。但し遠くから近づいてくるのではなく、閉ざされた視界が突然開けて現れるので、散策者はハッと驚く。右端は、山ノ手道の坂下に建つ名家の蔵が再生されたミュージアムカフェ。もちろん二階から出入りする。

二段目左端は、山ノ手道と参道との交差点ーリンチ風に言えば Node(ノード、結節点)。その右は坂の町にいくつか残る二階井戸、水質には問題があるが、ランドマークとしては今も機能している。その右の空に至る階段は、坂の町でも最も高い場所にあるカフェである。右端は光明寺の魔除け瓦。

三段目は左から順に路端の祠、高低差解消装置、山ノ手道にいつも駐められているバイク。右端は光明寺ギャラリーの展示会ポスター。

四段目と五段目は、アーティストが経営するカフェの集客用プレゼンテーションである。

それこそ無数に発見できるから、細街路自体がひとつのギャラリーになっているーともいえる。最初の入植者は猫をテーマにして芸術活動を始めたので、坂の町は無数の石猫が置かれている。世間に知られるようになって以来、紛失が続いて困っているそうである。最後の<イス>は、芸術作品なのか放置なのか不明。どう見立てたらよいか、



坂の町のアートの多くは額縁に入っていないので作品価値は見る人次第、訪問者の参加（写真撮影）を待っている。

### <とどまる><集う>

足を止めるポイントの何か所かが、とどまり、集う場所として選ばれているが、特に魅力がある場所というよりも、少し休みたいという消極的な理由によるようである。例えば止まり、集まっても他人の邪魔にならない開けた場所、例えば寺の境内、小公園、参道の広い階段踊り場等である（下写真）。



### 7-3 <尾道のパティオ>

（次ページ写真）

坂の町を探索中に撮影した写真を後から見直すと、住民のための<集う場所>の存在に気付く。建物と塀に囲まれた閉鎖的な光庭はパティオと呼ばれるが、坂の町には崖と古家によって閉ざされた潜在的パティオが、数多くみられるのである。

パティオ Patio とは世界で一番美しいと賞賛されるスペイン住宅の中庭である。住人はスタッコで真っ白に仕上げた壁面に色とりどりの花籠を吊り下げ、絵画的な（油画的な）興味を楽しむ—というより競うという。近年はオープンガーデンの気運にも呼応し、観光客にも公開されているとのニュースを耳にする。

坂の町では家々の庭の半分は、高くそびえる崖に面している。これに簡単な雨避け対策を施すと（最近では日除け対策も欠かせない）、おしゃべりや小行事に適したパティオが出来上がるのである。また近年は、空き家対策事業としても、パティオは重宝されて

<尾道的パティオ>



いる。廃屋が取り壊された場合、道がないから新築確認は得られないし、もちろん駐車場としても利用できない。だから必然的にパティオとして残るのである。上の写真によって<尾道的パティオ>を概説する。

一段目左の二枚は坂下平地街区での事例である。廃屋が撤去されても道巾は2m以下、空地は空地として残される。続く二枚は、空地再生グループによる庭造り工事のスナップである。二段目左の二枚はカフェに再生された<パティオ>、その右は井戸端に

水神が祭られた<元パティオ>、4枚目と三段目左端は<空き家再生パティオ>である。残る6枚は、坂の町では普通に見られる<通り道パティオ>である。

#### 7-4 坂の町細街路の Node 結節点

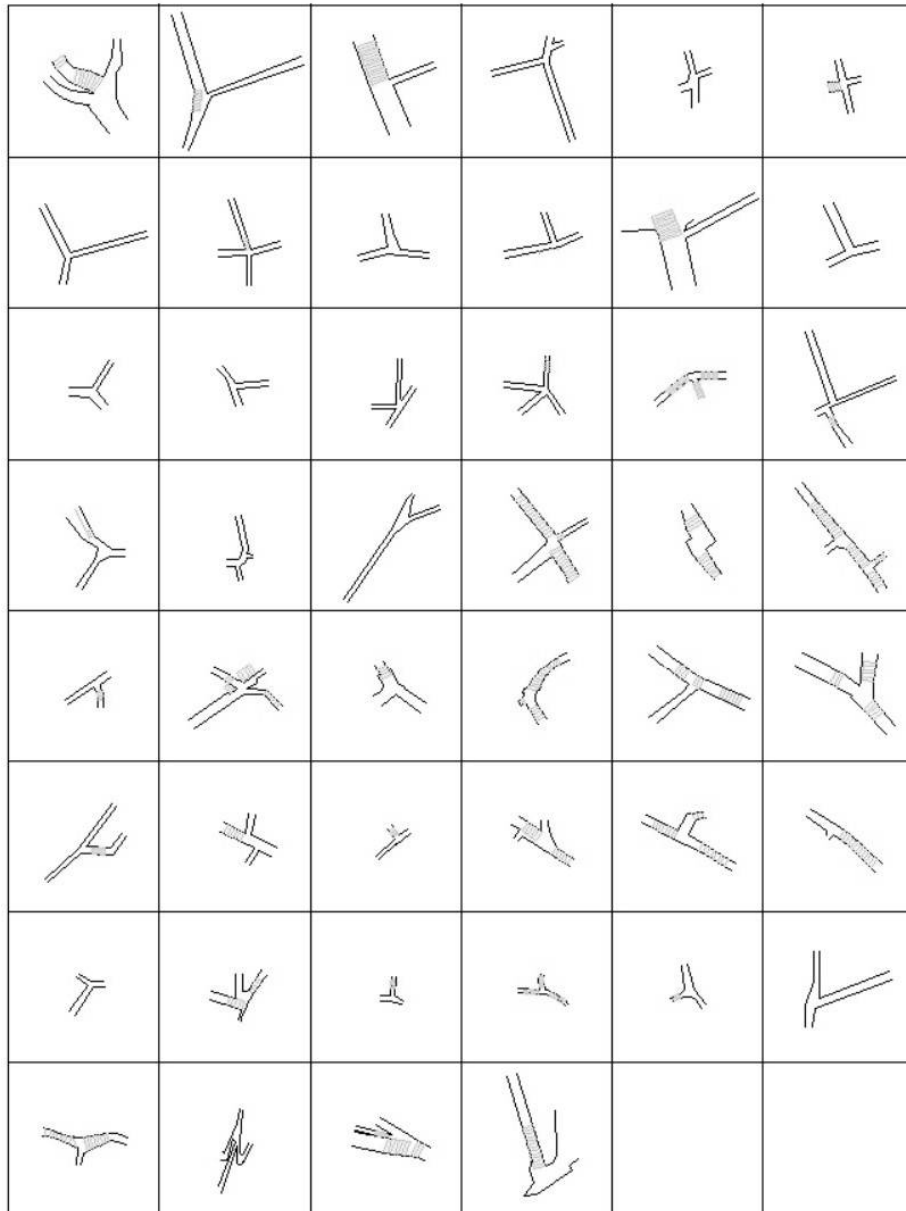
K. リンチは著書「都市のイメージ」(1章参照)において、イメージしやすい街が備えている形態的資質—イメージアビリティ **image-ability** について、詳細な議論を展開している。イメージしやすい街というと、分かり易いけれども、すぐに飽きてしまう街のようにも思えるが、リンチが **image-able** であると好ましく思うのは、<よく形作られ、明瞭で人目につく>だけでなく、さらに<時がたつにつれて、明瞭な相互関係をもつ連続的なパターンとしてとらえられる>ようになる、ある程度の手応えを備えた街である。

リンチは著作の目的を形態そのものの役割を明らかにすることにある定めて、諸都市の観察に先立つ仮説として、5つの物理的な形態を提案している。1.パス **paths** 2.エッジ **edges** 3.ディストリクト **districts** 4.ノード **nodes** 5.ランドマーク **landmarks** である。尾道坂の町はかたちと雰囲気とに特色がある **district** であり、散策して飽きない細街路は **paths** である。山の手道と呼ぶ **path** の大半が閉鎖的であるが、東西2か所で突然視界が開け、安全柵を隔てて街と瀬戸内風景の全容を一望できる、**edges** と表現するにふさわしい場所がある。そこで目に入るのは、安寧寺三重塔をはじめとする寺院諸施設が印す **landmarks** である。坂の町はまさに **image-able** である。街の魅力を一步一步段階的に要約してみせるリンチの卓見に驚くばかりであるが、では残る **nodes** は坂の町のどこで見られるか。

「尾道の斜面地における」において観察者が何かを見つけて立ち止まった場所のほぼすべてが、いくつか細街路が交差してつくる **node**・結節点であった。交差点 **cross** は直線路の交差をイメージさせるので、リンチは紐の結び目を意味する **node** を使用したものと思われるが、坂の町の交差点は **node**・結節点と呼ぶにふさわしい。山ノ手道路など等高線に沿った細街路では、結節点のみがある視界が開ける場所である。散策者はここで特徴を記録し、あるいは記憶し、土地鑑=ロケーションを得るのではないかと考えられる。自然道が結節するかたちは、人工物というより血管か気管支など生体のそれに近い。主と従がはっきり識別されるもの、十字路、T字路が想起されるものは、参道と新参道に係わる結節点である。

さて坂の町の **node**・結節点では、何が起きているのだろうか。前掲<空間構成要素一覧>に沿って検証してみよう。掲示板、看板、ポスターなど散策者に伝えたいもの、

坂の町の node・結節点



井戸、灯籠、お地蔵さん、ほこら、街灯など多くの人に役に立ってもらいたいものは、結節点に設置される。人の活動の分布図よく磁場に比喻されるが、それは磁力のエッジ効果（ゼロックス効果と呼ばれたこともある）が活動の集中に似ているからである。

しかし<一覧>を見る限り、結節点効果は突然の視界の開放に起因しているようである。視界が突然開けることによって、見えるものが数十倍に増え、しかも前に見たものとは違う。結節点ごとにパノラミックに展開される事物の発見は、本格カメラの仕事である。

## 結語

再び、<共有される道 The shared street>とは何か。人が脅かされていると実感されるクルマ社会では、人と車の共存が取り敢えず思い浮かぶ。尾道市も例外ではない。次の写真は坂の町の麓で見かけた市政広告である。この場所は 30m 程度クルマが入れた。



尾道坂の町を例にとるかぎり、<共有される道>とは住人の生活の場として共有されている一との意味であった。但し、坂の町においても道はあくまで公共空間であって、私生活の漏出は一切見られなかったことも、付記しておかなければならない。人の道だけで活きている伝統的街区がもし残っていた場合、安易に再開発してしまう前に考えてみる必要がある一と坂の町は問題提起しているように思える。

「パタン・ランゲージ」に描かれた魅力ある細街路の条件

## PL\_120 PATHS AND GOALS / 歩行路と目標

長過ぎない小道と目標設定の多様さが、歩き疲れない細街路の必要条件であるとい

う。これらは意図してできることではない。計画的に過ぎて単調になる細街路設計への戒めであろう。

#### PL\_121 PATH SHAPE / 歩行路のかたち

**Shape** とは歩行者が自然に留まるようになる、細街路の膨らんだ部分を指す。リンチのいうノードであり、坂の町では実に多様なノードがみられる。千光寺参道の階段道では、数十段上がるごとやってくるかなり広い平坦部分（踊り場？）もまた。**Shape** の役割りをよく果たしている。